

閉とぎされた庭

野村胡堂

一

銭形の平次は、春の陽がいつぱいに這い寄る貧しい六畳に寝そべったまま、紛煙草をせせって遠音とおねの鶯うぐいすに耳をすましておりました。

この上もなく天下泰平の姿ですが激しい活動のあい間あい間に、こんな閑寂な境地を楽しむのが、平次の流儀でもあったのです。

「八、何をしているんだ。用事があるなら大玄関から入れ」

いきなり平次は振り返りもせず、後ろの方——ささやかな庭木戸のあたりにいる人間に声を掛けました。

「ヘッ、よくあつしと解りましたね」

平次のためには大事な『見る眼嗅ぐ鼻』ですが、人間の焼が少々甘い八五郎は、木戸の上に長んがい顎あごを載つけたまま斯こう言うのです。

「たいそう意気な影法師が縁側まで泳いで来るじゃないか、そんな根の弛ゆるんだ髻ゆづり節が、朝っぱらから俺の家を覗くとしたら、八五郎兄哥あにいでなくて誰だと思う」

「違えねえ、——が、大玄関は洗濯物と張板で塞ふさがっていますぜ」

八五郎はそれでも気になるらしく左の方に曲った髻ゆづり節を直しながら、木戸を押開けてバアと入って来ました。

「お伴つれはどうした、八」

「そいつも影法師の鑑定かんていでしよう、親分」

「いや、今度のは匂いだよ」

「まア」

少し嬌きようひを発したらしい若い女の声、それを聴くと平次は起き直って、

「まア入れ、そこに立って居ちゃ、お長屋の衆が通られまい」と蟠わだかまりもなく招じ入れるのでした。

八五郎といっしょに來た客というのは、十七八の可愛らしい娘で、至って粗末な木綿物もめんを着ておりますが、何んとなく氣性者らしいところがあり、平次の悪い冗談に腹を立てたものか、八五郎の後ろへ隠れるようにツンとそっぽを向いて居ります。

「ね、親分。若い娘が一人煙のように消えてなくなつたんですがね、こいつは年代記ものじゃありませんか」

八五郎は話上手に持かけました。

容易に人を縛らぬ錢形平次は、一面にはまた恐ろしく無精なところがあつて、江戸の町人たちがよくよく平次の叡智えいちと腕とを借りたいと思う場合は、氣性を呑み込んだ八五郎に頼んで、こんな具合に持ちかけ、平次自身の乗出して来るのを待つほかはなかつたのです。

「婆さんか赤ん坊が消えてなくなりや不思議だが、若い娘や息子が行方不知しれずになるのを一々不思議がつた日にや、江戸に住んじゃ居られないぜ」

「それが親分、ただの行方不知とはワケが違いますよ。何しろ内から戸締りをしたまんま、床が藻も抜けの殻からで、寝んでいた筈の娘が煙のように――斯こう」

ガラッ八は一生懸命両手を宙に泳がせて、煙の恰好かつこうを見せるのでした。

「それはいったい何処で、誰が消えてなくなった話なんだ」
平次の興味もようやく動きはじめた様子です。

「本郷金助町の御浪人大滝清左衛門様の一番目娘でお茂世さん、
——詳しいことはここに居る妹のお勢さんに訊いて下さい」

八五郎は席を譲るように身体を捻ひねって、後ろに居る若い娘を指さしました。

「親分、お聴き下さい。父は不心得者は放っておけ——と申しま
すけれども、姉は自分勝手に家出をするような人ではございませ
ん。あんまり不思議ですから、八五郎さんにお願ひしましたが、
戸締りをしてある家から、姉はどうして外へ出たのでしょうか——
いえ姉が外へ出てから、誰が戸締りをしたのでしょうか」

「さア」

「お願いでございます、姉を捜さがして下さい。——明後日になると、
芝田様がお見えになる筈で——」

お勢と言われた娘は、先刻さっきの軽い怒りなどは忘れてしまった様
子で、八五郎の側へ膝をすすめました。身扮みなりは質素な町人風で、
裏やら袖口やらにほのめく赤い物も可憐ですが、物言いや態度は
武家風で、可愛らしいうちにも、妙に侵おかし難いところがあります。

「芝田様？」

「姉の許婚いいなずけの方でございます、明後日九州から御入府の筈で」
「ともかく、詳しく伺いましょう」

平次もようやく開き直りました。

お勢と八五郎の話を綜合そうごうすると、一昨日の朝、本郷切つての美人といわれた、金助町の浪人大滝清左衛門の娘お茂世が、いつまで経つても自分の部屋から起きて来ないので、妹のお勢が姉の部屋を覗くと、床は空っぽで部屋は嚴重に締め切ったまま、お茂世は影も形もなかった——というのです。

「履物はきものは？」

平次は口を挟はさみました。

「其処そこまでは気が付きませんでした」

賢そうでも若いお勢には、そんなところまで気が廻らなかつたのです。

「それから心当りを方々尋ねて見ましたが江戸には近い親類も懇意な家もなく、姉の行方は少しも見当が付きません。父は姉が不心得の家出をしたと思い込んで、少しも相談に乗ってくれず、思案に余つて少しの手蔓てづるをたよりに、八五郎さんをお願いしました」

お勢の話はなかなか行届きますが、肝心かんじんのことを二つ三つ言い落しているようです。

「不心得の家出をするような心当りがあるのでしょいうな」
それを追っかけるように、平次の問いが突っ込みます。

「――」

お勢はさすがに答え兼ねてモジモジしていると、八五郎が引取って、

「こいつは近所の噂を聴き集めたんだが、行方不知になったお茂

世さんは、九州から出府する許婚の芝田何とかいうお侍を嫌って
いたそうですよ」

「好きな男はなかったのかな」

八五郎の説明に、平次はもう一步踏込みます。

「大層な容貌きりようだったというから、町内の若い男は門並逆上のぼせあがって
いましたよ、中でも遊び人の喜三太——お厩中間上うまやがりの喜三
太という厄介な男を親分も御存じでしょう。それから同じ町内の
呉服屋——三河屋の若旦那で敬太郎というのが一番夢中になって
居たということで」

「お嬢さんの方は？」

「親御がやかましいから、浮いたことはなかったでしょうが、若
旦那の敬太郎は満更じゃなかったようで、——ね、それに違いな
いでしょう、お嬢さん」

「——」

いきなり八五郎に問いかけられてお勢はハツと赤くなりました。
姉の素振を思い出して、自分のことのように恥かしかつたの
でしょう。

「ここで考えたところで眼鼻が付くまい、ともかく、行つて見る
としようか」

平次はようやく御輿みこしをあげました。

「そう来りゃ百人力だ、どうも二本差は苦手だね、あつしじゃこ
の上探りの入れようはねえ」

八五郎は首を縮ちぢめて薦すすめるのです。無遠慮に突っ込み過ぎて、
お勢お茂世もよの父親——大滝清左衛門に小っぴどくやられたことを
思い出したのでしょう。平次の家——神田台所町から、湯島金助

町まではほんの一と丁場。八五郎を従え、お勢に案内された平次、間もなく、思いの外構えだけは大きい浪宅の入口に立って居りました。

そこで暫らく待っているうちに、お勢はどう父親を撫めたものか、

「父がお目にかかると申します、どうぞ此方へ——」
と改めて二人を迎い入れます。

構えの大きい浪宅と見たのは、大家の寮へ留守番代りに住んでいるせいらしく——これは後でわかったことですが——中へ入って見ると、屋台にそぐわぬ調度の貧しさが、寒々と人に迫るものがあります。

「これは、平次殿と言われるか、拙者は大滝清左衛門、以後御見識りを」

尊大でない程度に四角張って、いとも古風な挨拶をするのは、五十二三の浪人者で、人品も賤しからず、貧乏臭いのさえ我慢すれば、ずいぶん立派な人柄です。

「お嬢さんが見えませんかそうで、御心配なことでございます」

「何、些細なこと、——親に無断で身を隠すような不心得者は探す迄もないことじゃ」

以てのほかの機嫌です。

「あれお父様、わざわざお願いして来て頂きましたのに」

飛付いて父親の口でも塞ぎたいようなお勢の熱心を見ると、さすがにその上抗い兼ねたものか、

「では勝手に」

むずかしい顔の紐をほぐしもせず、そのまま奥へ引込んでしま

いました。

三

平次はお勢の案内で一と通り家の中を見せて貰いました。某という大町人の建てた寮を、そのまま懇意こんいずくで借りたという家は、少し古くはなっておりますが、戸締りなどはなかなか厳重で、外から迂闊うかつに入れる隙もなく、それに間数も六つ七つ、主人の清左衛門と、若い娘二人が奉公人も使わずに住むにしては、少し広過ぎる位です。

姉のお茂世が寝ていた部屋というのは、右手へ突き出した六畳で何にかの都合で後から建て増したところらしく、その手前の四畳半——妹のお勢が寝んでいる部屋を通らなければ何処からも行けないようになっております。

外部に出られるのは突き当りの一方だけ、そのこの雨戸三枚は、その朝嚴重に内から締めてあったとお勢が証言したのに間違いはないでしょう。尤も南側もつとには一間の腰高窓がありました、そこには頑丈な格子が打ってあって、猫の子の出入りもできないようになつております。

念のため、お茂世の持物を一と通り見せて貰いましたが、娘らしく小布こぎれの箱と物の本二三冊と、手習い草紙と、古い歌留多かるたと、それに可愛らしいもの細々こまこましたものが少しばかりあるだけ、貧しさに徹てつしてろくな紅白粉も、髪かみの飾りもない痛々しい有様です。

「隣の妹さんの部屋へ抜ける外には、ここから出られる道理はありませんね、親分」

八五郎は今さら感心しております。

「隣には私が寝やすんでおります」

お勢は言い切りました。丸ぼちゃで健康そうで、存分に可愛らしくあるのですが、この娘には何処か確りしたところがありそうです。

平次はいちおう縁側の様子から戸袋の具合、戸締りなどを調べましたが、上下の棧さんをおろして置けば、雨戸の印籠いんろうばめは思いのほか嚴重で、外から開けることができたにしても、戸外から締めることなどは思いも寄らず、お茂世がそつと脱出して、外から締めて置いたのではあるまいかと思つた平次の予想は、根抵から引くり返されてしまいました。

それに、雨戸の外は五六坪の小さい庭で、庭を巡つて大町人の好みらしく頑丈な板塀めぐを繞らし、塀の上には少し痛みかけた忍び返しが一列の銚ほこを並べたように、あらゆる出入りの可能性を否定して春の萌黄色もえぎの空に突つ立つて居るではありませんか。もし人間が何んかの方法でこの忍び返しの上を越したとしたら、忍び返しの五本や三本は、無抵抗に折れてしまったことでしよう。

外への通路と言つては、北側の横手に小さい木戸が一つ切つてありますが、幾年も幾月も開けなかったらしく、海老錠えびじょうがすっかり錆さびついて、お勢が持つて来てくれた鍵を差し込んでも廻ろうともしません。庭は陽が疎うとくて、ようやく霜柱が解けたばかり、犬の仔が通つても足跡を残さずに済まぬ柔かさ――

「この出入りは難かしい、羽でもなきや」

「するとやはり消えてなくなつたんで」

平次の独り言に八五郎の注ちゅうが入ります。

「人間が消えてなくなるわけではないよ、妹さんが寝む前に脱出したんだろう」

平次の判断はどこまでも常識的でした。

「いえ、私が寝むまで、姉は六畳でお仕事をしておりました」

お勢はどこで聴いていたものか、二人の前へ顔を出すと、こう抗議するのです。

「そうなると神隠しだね」

八五郎は酔っぱい顔をします。その頃は記憶の喪失で行方不明になったのや、原因不明の失踪を『神隠し』という言葉で簡単に片付けていた時代です。

念のため向う三軒両隣を当って見ましたが、門並小商人としもたやで、何んの得るところありません。お茂世の部屋の西、板塀の外には寄りそったように長屋が三軒建っておりますが、一軒は空家、一家は摘み綿の師匠でお鶴という中年の一人者、一番手前の一軒は古金買の金兵衛の家で、これは夥しいガラクタの山の中に住んでいるような暮し、子沢山と見えて恐ろしく丈夫な物干竿が三本、濡れたの乾いたの、あらゆる物をブラ下げて、日向をあさったように三方へ張り渡してあります。

「帰ろうか、八」

「これっつきりですか、親分」

「神隠しじゃ十手捕縄の御威光でも及ばないよ。ところでお前は遊び人の喜三太と呉服屋の伴の敬太郎の様子を見て来てくれ。お茂世が行方不知になったという噂は町内で知らない者もないだろうから、少しでも引っかかりのある者は、岡っ引の顔を見るとソワソワするかも知れないがあわてて縛っちゃいけないよ。神妙

に家に居るなら、それを見定めて帰りや宜いんだから」

「へエー」

平次の命令は行届きますが、それも全く無駄な努力で、その晩八五郎の持ってきた報告によれば、喜三太も敬太郎も、この二、三日はどこへも行かず、神妙に家にいたということでした。

四

事件はこれがほんの発端でした。翌る日はこの平凡らしい、――が奇つ怪な^{いんし}因子を^{はら}孕んだ行方不明事件は、一挙に妻まじい破局へ盛り上げてしまったのです。

「親分、た、大変っ」

^{まげぶし}鬚節を先に立てて飛んで来た八五郎は、格子に突き当って、ボンとけし飛んで、例の木戸からバアと顔を出しました。

「馬鹿野郎、何が大変なんだ。第一、懷手のまんま飛んで歩いてちや危ないじゃないか」

「懷ろ手を抜く隙もないんですよ、今日のは^{こわたり}古渡の大変で、――

金助町の浪人の娘――あのお茂世というのが、死骸になって庭の真ん中に投り出されてあったとしたら、親分だって驚くでしょう」

斯んな調子で物を言うガラッ八ですが、事件の重大さは、その^{はず}弾む息にも、変った眼の色にも充分読み取られます。

「よし、行こう」

平次は立上がりました。こうなると獲物を見付けた獵犬の本能が目覚めて、難事件の真ん中に飛込み、悪者の首根っこを押えて、地獄の釜の中からでも引っこ抜いて来なければ承知しない平次

だったのです。

金助町の浪宅に行くと、あれほど真四角に取済した大滝清左衛門も、弥次馬や土地の安岡っ引に包囲されて、娘の非業ひごうを悲しむ暇もなく、たどろろうろしておりました。

「あ、銭形の親分」

人波を掻きわけて近づく平次と八五郎を、眼聴めざとくも見付けたのは妹娘のお勢でした。

「大変なことでしたね、お嬢さん」

「姉の仇を討って下さい、親分」

慰められるとツイ涙声になって、平次とりすがに取縋りそうにするのは、さすがに小娘気の失せないお勢ですが、平次がまだ若くもあり、好い男でもあるのに気が付くと、ハッとした様子で立ち縮すくみます。

お勢の部屋を通って、お茂世の部屋だった六畳の縁側から見ると、西向の狭い庭にようやく高くなった陽足ひあしが這って、その中程——ぐつと板塀寄に、検死前のお茂世の死骸が横たわっているのです。

足跡は庭いっぱいに散っておりますが、それはお勢のらしい女の跣足はだしと、庭下駄の跡だけで、外から入ったらしい足跡は一つもなく、表の方に出られるたった一つの木戸は錆付いたまま、昨日から開けた様子はありません。

死骸の位置は塀に近いのですが、頭の上の朽ちかけた忍び返しには何んの異状もなく、死骸を外から運び入れた形跡は一つもないのですから、平次の常識論を以ってすれば、家の中から持ち出して捨てたとは思えず、八五郎の想像を飛躍させると、天から降ったとも見るほかはありません。

「今朝、雨戸は？」

平次は後ろに従うお勢を顧みました。

「念入りに締めてありました。けさ風を入れようと思って、雨戸を開けると――」

お勢はゴクリと固唾を吞みます。

「ともかく」

平次は庭下駄を突っかけて降りると、足跡を踏まないように死骸に近づき、踞んだままそっと死骸の顔を覗きました。

「――」

危うく声を立てようとして、そのまま息を吞むと、平次は両手を合せて、しばらくこの凄じくも美しい死骸を拝んでおります。

あまり陽当りのよくない、まだ春が蘇ったとも思えぬ庭の柔かい土の上に、若い娘の死骸が顔を上向にして無造作に転がされてあるのです。

苦悩に歪んで、髪も衣紋も乱れておりますが、それは実に拔群の美しさ――半眼に開いた眼、顰む眉、豊かな頬、色のない唇、死の手の惨虐な化粧に痛め抜かれながら、これはまた何んというお面のような静寂な美しさでしょう。深刻な苦悩の跡を刻み付けながらも、それは観念しきった、いとも静かな死顔です。

襟をはだけると、首には娘の帯上げらしい赤い紐をキリキリと巻いてありますが、念のためにその紐を解くと、円い首筋には大した溝もなく、反対に側に投出した手は妙に歪んで、可愛らしい手首が、痛々しいほど縊れております。

胸をはだけると、所々紫色の斑点があり、手にも足にも傷がある上、身体は庭の柔かい土にめり込み、八五郎の想像したように、

天からでも降ったと思わなければ、テニヲハの合わないところもあるのです。

「この着物は？」

「寝巻ではございません。姉が好きで着た不断着で——」

平次の問いの真意を覚って、お勢はこう注ちゅうを入れました。古いが、柄の良い、折目正しい銘仙の袷は、ひどくもみくちゃになっておりますが、何んとなく身躰みだしなみのよさを思わせ、寝床から抜け出してフラフラと外へ出たものでないことは明らかです。

五

「どんなに不思議に見えても、これは人間の仕業に違いありません。極悪非道で、おそろしく悪知恵の廻る人間——そいつを縛るのが私の役目でございます」

「——」

平次は後ろにソツと立って、娘の死顔を見詰めている『悲しみの立像』のような父親——大滝清左衛門を顧かえりみました。

「つまらないと思ったことでも、どんな小さい事でも、お嬢様の関係したことは皆んな仰しやって下さい」

「——宜かろう、なんなと訊くが宜い」

清左衛門は大きくうなずきます。

「第一に、お嬢様は許婚の芝田様とやらが江戸へお還かえりになるのを、あまり喜んではいらっしゃらなかったそうで」

「その通りだ、——あんまり小さいとき、両親の話し合いで決めた約束で、娘はそれが気に入らなかったらしい、不心得なことだ

が――」

「芝田様というのは？」

「昔の藩の者だが、――」

「外にお嬢様に御執心ごしゅうしんの方が二三人あったように伺いましたが」

「左様、そんな事もあったようだ」

「遊び人の喜三太、呉服屋の倅敬太郎というような」

「左様」

大滝清左衛門はいかにも苦々しい様子です。

「他には？」

「これは関係のないことと思うが、――さる大身の旗本から、側近く使召いたという申出はあった。再三の望みであったが、瘦やせても枯れても大滝清左衛門、これでも武士の端くれじゃ。金に眼がくれて、娘を手掛けに出しては祖先にも相済まぬ」

思い出すのさえ苦々しいらしく、清左衛門の顔は憤怒に歪ゆがみます。

「お嬢様は？」

「申すまでもない、たいそうな腹立であった」

「そのお旗本のお名前は？」

「――」

「それはぜひお明しを願います」

かわ

「関りのないことだが、念のために申上げよう、――湯島切通かかわしに屋敷を持っていられる、三千五百石の直参、望月丹後たんごという仁じんじゃ。内室は先年産後で亡くなられ、丹後殿は三十五の若盛りで、定まる後添もない。拙者の娘茂世もよを行儀見習として差し出して欲しいという申出で、大枚の仕度金を持って参ったのじゃ。いず

れ権門大家から改めて後添を貰うまでの繋ぎのつもりであろう。その仕打が憎いから、拙者はきっぱりと断った。その後人を変えて再三の申込であつたが、一度お断り申した上は、金輪際変換することではない」

大滝清左衛門は頑固らしく首を振るのです。

「仲へ入って口をきかれた方は？」

「それが氣に入らぬのじゃ。筋の通った人間でも立てることか、桂庵を内職にしている町の誰彼れ——たとえば隣家の古金買い、金兵衛のような人間では話になるまい」

清左衛門は古金買いの金兵衛などを人間の屑のように思っている様子です。

ここでこれ以上に訊く事もないと見ると、平次は八五郎を促して外へ出ました。噂に上った隣の古金屋の金兵衛は勝手口へ来て何やら手伝っておりますが、四十五六の小柄な親爺で、無口で、頑だけで、そのくせ何処か愛嬌のある人間です。

「これは銭形の親分さん、御苦勞様で」

そんなお世辞を聞捨ててお勝手口から隣の長屋をのぞくと金兵衛の家は相変らず三本の物干竿が洗濯物で一パイ、隣の摘み綿の師匠の家は弟子やら町内の金棒曳きやらでハチ切れるような姦しさです、多分この変事の噂でもしているのでしょう。

「八、心当りを一と廻りしようか」

「へエ——」

平次はまず八五郎といっしよにツイ五六軒先のお厩の喜三太の家を覗きました。

「誰もいませんよ。昨日から明けっ放しで、どこかの賭場へ潜り

込んでいるんでしょう」

隣のお神が叱るような調子で注意してくれます。

「今度は三河屋の伴を当って見ましようか」

八五郎はもう外へ気が移っておりますが、

「待った、八。あれは何んだ」

平次は格子から家の中を指します。

「何んです、親分」

ちようど詔あつちえたような障子の穴があつて其処から見える畳の上に、娘の扱しごき帯らしい紅鹿の子の紐が一本、長々と眼へ焼きつくではありませんか。

「変ですね、親分。喜三太の野郎は独り者ですぜ」

「入って見よう」

平次の手に従つて格子戸は開きました。障子を押し倒すように入ると中は乱離らんりこっばい骨灰、土瓶どびんも火鉢も引くり返してその水と灰の中に例の赤い紐がむずかしい謎を投げかけるように長々と投り出してあつたのです。

「親分、ちよつと、親分」

外から火の付いたように八五郎が呼びます。

「何んだ、八。騒々しいじゃないか」

「あれを見て下さい、三河屋の若旦那が――」

「何がどうしたというんだ」

八五郎の調子の物々しさに驚いてともかく喜三太の家はそのままにして飛出した平次の前に、日頃平次と対立的な地位に立つて、手柄争いにばかり没頭ぼつとうしている中年者の御用聞三輪みのわの万七とその子分のお神楽かぐらの清吉が、三河屋の伴敬太郎に腰縄を打って、

追ったてるように番所の方へ行くではありませんか。

「おや、銭形の親分。浪人者の娘を殺した下手人げしゅにんなら、もう拳がりましたよ」

お神楽の清吉は早くも平次の顔を見てこんな事を云うのです。

三河屋の倅敬太郎は、平次の方に燃えるような嘆願的な瞳を向けましたが、後ろから跟ついて来た万七に睨にらまれると、そのまま俯向いて、トボトボと去って行きます。

「好い男だね、八」

平次は思わず斯う云いました。少し華奢きゃしゃですが、腰縄を打たれて萎しおれた姿は、歌舞伎芝居の二枚目のようで、浪人の娘お茂世と、何彼の噂が立ったのも無理のないことです。

「それよりあつしはあの清吉の野郎の面が癩つらにさわつてなりませんよ。敬太郎は本当に下手人でしょうか、親分」

ガラッ八は鼻の先で拳骨を振り廻して、カンカンに腹を立てております。

六

翌る日、ガラッ八の八五郎は鬼の首でも取ったように、恐ろしい勢いで銭形平次の家へ飛込んで来ました。

「親分、喜んで下さい。お神楽の清吉の野郎に一と泡吹あわかせましたぜ」

「清吉が泡を吹こうがしゃっくりをしようが、俺の知ったことじゃないよ」

平次は以てのほかの機嫌です。

「でも、あの浪人の娘——お茂世が殺された晩、三河屋の敬太郎は店から一と足も出なかったという生証人が七人もあるんだから確かでしょう。その上、あの晩どこに居たかはっきり云えないお厩の喜三太の家には、殺されたお茂世の紅鹿の子の扱帯しじきがあったでしょう、遁のがれっこはありませんや。賭場とばに潜っているのを引っ立てると、最初はジタバタしていましたが、紅い扱帯を見せると、——そいつはお茂世さんのだ——と、酷ひどくびっくりして、素直に番所へ引かれて行きましたよ」

八五郎が得意になったのは、斯こうした理由だったのです。

「びっくりして、引かれて行った——？ そいつは飛んでもないことをしたよ、八」

平次は妙に考え深くなりました。

「誰が何んといったって、あの喜三太の野郎が下手人に間違いありませんよ、——大河の旦那（係り同心）も、あつしの話聴いて紅い扱帯しじきを見せられると、すっかり堪能たんのうして、すぐ敬太郎の縄を解くように言っていましたか——」

「待ってくれ、八、俺には呑み込めねえことばかりだ。お前の手柄にケチを付けるわけじゃないが、罪のないものを人殺しにしちやなお悪い。もう少し様子を見て居ようと思ったが、——こうなっちゃ落付いているわけにも行くめえ、どりゃ」

銭形平次は、とうとう御輿みこしをあげたのです。その後から、不服そうに跟いて行く、八五郎の器量の悪さ——。

銭形の平次は跟いて来る八五郎の顔色などには頓着なく、一番先にお厩うまやの喜三太の家を覗いて、その隣家のお喋りらしいお神に声を掛けました。



「お神さん、俺は喜三太の友達なんだが、奴さん何処へ行ったか
知りませんか」

「お前さん、あの人の友だちなら気を付けるが宜いよ。大きい声
じゃいえないが、喜三さんは先刻岡っ引に縛られて行きましたよ。
怖いね、本当に」

お神は腹の底から脅おびえている様子です。平次は昨日もここを覗
いて、皆と格子戸越しに話した筈ですが、幸い顔は見られなかつ
たらしく、そんなことに気の付いた風もありません。

「へエ——、そんなことは知らなかったが——あの野郎は盗みや喧
嘩をする柄じゃなし、縛られたとすれば、せいぜい女出入りか勝
負事だが、お神さん何にか気が付いたことはありませんか」

「さア」

「一昨日の晩は無事に巣へ帰ったでしような」

「一と晩家をあげたようですよ。どうせ締りのない家だが、帰れば壁隣りの私が知らない筈はないから——」

「若い女が来やしませんか」

「近ごろは、その方は恐ろしい不漁だ——なんて言っではいましてよ」

「喜三太は近ごろ大望を起して、金助町の浪人者の娘を張っているという評判だが——」

「そんな噂もありますが、相手は武家の出だから、ツンとして中間上りの喜三さんなんかには洩汁はなも引っかけないそうですよ——そう言えばその武家の娘が殺されたというじゃありませんか」

「そんな話も聞いたが——」

お神さんの話が肝心かんじんの点に触れると、平次は器用に切上げて、物蔭に隠れている八五郎を促うながしながら、路地の外へ逃げ出しました。

「八、聴く通りだ。どんな証拠があるにしても喜三太は下手人じゃないよ」

往来へ出ると平次は、憑つかれたような顔をして跟いて来るガラッ八に斯う云うのです。

「へエー、あの女の云うことを真に受けて宜いんでしょうか。親分」

「たいてい間違ひあるまいよ。中年のやかましそうな女が、壁隣りで若い男が逢引しているのを知らずにいる筈はないし、知っていて隠す筈もないじゃないか。そんな事を嗅ぎ出しや、町内中に触れ廻る柄だよ」

「——」

「喜三太は娘に嫌われていたというから、三日前の晩に、あんなに器用に誘い出せる筈もなく、誘い出したところで隠しておく場所もあるまい。それに喜三太が本当に娘を殺したのなら、長火鉢や鉄瓶まで引くり返して、その上へこれ見よがしに紅鹿の子の扱帯しごきを長々と載っけておく筈もあるまいじゃないか」

「その扱帯を見せられてびっくりしたのは、親分」

八五郎は辛からくも最後の抗議を持ち込みました。

「それも考えようじゃ喜三太に罪のない証拠さ。もし身に覚えがあるなら、そんなものを見せられても、白ばっくれて平気な顔をするよ——たぶん賭場とばで夜明かしをして、何んにも知らずに出て来たところをお前に捕まった上、紅い扱帯を見せられて胆きもを潰したんだろう」

「そんなのですかね親分」

「本当の下手人は恐ろしく企たくらみの深い、この上もなく太てえ野郎だ。若旦那の敬太郎や、厩うまや中間上がりの喜三太のような三文奴やつこじゃあるまいよ」

「すると」

「早合点は禁物だ、もういちど振り出しに戻って念入りに調べる外はあるまいよ」

江戸開府以来といわれた名御用聞の銭形平次が後で『——こんな念入りの細工は見たことも聞いたこともない——』と述懐じゆっかいした恐ろしい事件はこの時まではまだ、真相を嗅ぎ出すささやかな手掛りも見付かってはいなかったのです。

三河屋へ行つて見ると、若旦那の敬太郎はまだ帰されませんが、いずれは無事に帰るといふ前触まえふれがあったものらしく、店中は一脈の不安を残しながらも、何んとなく明るくなっております。

平次はいちおう店中の者に当つて見ましたが、平常は三日に一度、五日に一度家をあける若旦那ですが、この四五日は母親の加減が悪かったのと、店の仕事が忙しかったので、孝行者の敬太郎は何処へも出ず、

「それはもう、私ども皆んなの首を賭かけても差支はございません。若旦那はこの四五日——いやちようどあの晩で五日になりますが、親御様が床とこに就かれてからというものは、一度も外へ出られなかったことは確かで、店にも裏にも多勢寝ておりますから、誰にも知れないように、ソツと抜け出すなんということは、できないことでございます」

こう言う老番頭の言葉は疑うべくもなかったのです。

「若旦那がちよいちよい出るのは出るんだね」

「若い盛りでございますから——尤もつとも悪所通いなどはいたしません、お道楽もあることでございます」

「道楽？」

「小唄を稽古けいこしております。そりや良いお声で、若い方にしては珍らしく錆さびのある、——斯うふんわりとした柔やわらか味のある——」

番頭は年とし甲斐がいもなく若旦那の隠し芸を褒めるのでした。どうかしたらこの禿頭の番頭も同じ道楽を持っているのかも知れませんか。

平次はそこを宜い加減に切り上げて、金助町の浪宅——お茂世の父の大滝清左衛門を訪ねました。

清左衛門は寺の方へ行つたそうで折悪しく留守、代って妹娘のお勢は、相変らずテキパキ応待してくれます。

「お嬢さん、昨日訊き漏したことを、ほんの二つ三つ訊きたいんですが」

「え、どうぞ、——でも、姉上を殺した下手人はもう縛られたというじゃございませんか」

「それが腑に落ちないことばかりで、困ってしまいましたよ」
「腑に落ちないことと仰しやると？」

「例えば、お姉様がどうして殺される前の晩戸締りをしてある家から脱出したか、——いや、お姉様が脱出した後、誰が戸締りをしたか。第一それからしてわからないじゃありませんか」

「父上か私が、姉上の脱出するのを手伝つたと仰しやるんですか」
お勢は辛辣に撥ね返しました。この十八娘は全く小気味の良いほどピチピチしております。

「そんな筈はないから不思議なんです、——これまでもお姉様が、夜分に外へ一人で出られるようなことはなかったでしょうね」

「そんなことがある筈もございません。いつでもお休みになる前には、私に声を掛けて下さるお姉様ですもの、——それに、私の部屋を通つて玄関へ出るか、私の枕元の雨戸を開けて裏に出る外には、外へ出られない筈ですもの」

「お夕食の後では、すぐ銘々のお部屋へ引取るのですね」

「ええ、父上も、姉上も、静かなところが好きですから、戌刻か戌刻半には別々に銘々のお部屋に引取つて、お仕事をしたり、

お手習をしたり、御本を読んだりします」

「お姉様が見えなくなった晩は？」

「戌刻（八時）少し過ぎに御自分の六畳に引取って、お仕事をしていたらしゃる様子でした。私は父上のお部屋でお肩を揉（も）んで上げて、半刻ばかり遅れましたが」

「それから」

「亥刻（十時）少し前に、お隣の部屋からお姉様が——お寝みなさい、私はもう寝みましたから——とお声をかけて下さいました」

「——確かに、もう寝んだ——と言ったのですね」

「え」

「それが、翌る朝見ると床は敷いてあったが、お姉様は藻（も）抜（ぬ）けの殻（から）であつたと言うんでしょう。——床の中で声を掛けたとすると、その後で着換をして脱出したわけですね」

「籠（かご）ったようなお声でした。確かにお床の中に潜（もぐ）って——お寝みなさい——と仰（お）しゃったに違いありません」

「？」

「私は若いくせに眼（ま）ざといと言われております。私の眠（み）った後で、私の枕元の雨戸を開けるのを知らずにいる筈（はず）はございません。雨戸は御覧（ごらん）になればわかりますが、建て付けが悪くなって、開けようとすると大きな音を立てるんです」

こう言うお勢の言葉には何んの疑（ぎ）いを挟（はさ）む余地（よ）もなかったのです。

念のため、隣のお茂世の部屋を見ると、相変らず鉄桶（てつとう）のような嚴重（じゆう）さで、僅（わずか）かに左手にある一間の腰高窓（こしだかまど）が、障子（しやうし）の破れたまま、僅（わずか）かに外界との連絡（れんらく）を保（たも）っているだけ。雨戸にも何んの異状（いじやう）もな

く、庭の木戸も相変らず錠が錆び付いたままです。

「お姉様が行方不知になった翌る朝、この窓はどうなっていました」

「何うもなっていないません。格子はその通り丈夫ですし」

「いえ、雨戸は締っていましたか」

「雨戸は締っていなかったようです。格子があるにしても、用心深いお姉様がそこを開けたまま寝む筈はないんですが」

「窓の外は？」

「其処はちょうど裏の三軒長屋の空家のあたりになっております」

窓を開けると、そこは庭が狭くなって、塀までほんの間ばかり、塀の外には三軒長屋の屋根が、近々と眉に迫るのです。

八

平次と八五郎は、念のため裏の三軒長屋を覗きました。

一番手前の金兵衛の家は相変らず洗濯物が長いせんたくもののや短かいのや、太いのや細いのを取交ぜた三本の物干竿一パイに掛け連ねてありますが、肝心の金兵衛は留守で、少し知恵の足りないらしい十二三の伴が一人、ぼんやり日向に寝そべって、何を訊いてもハキハキした返事もしません。

お隣の摘み綿わたの師匠のお鶴は、平次と八五郎の顔を見ると、下卑た品しなを作りながら、恐ろしい勢いで捲くし立てました。

「まア、親分さん方、御苦労様ですこと、——お隣のお嬢さんを殺した下手人は、もう拳がったそうじゃございませんか。三河屋の

若旦那じゃありませんとも、あの優しい若旦那が、人などを害めるものですか、下手人はお厩の喜三太ですよ、誰が何んと言つても、ええ」

喋舌しゃべり捲くるのを、唯一のお世辞と思ひ込んで居るのでしよう、平次もややしばらく、この饒舌の大汜濫はんらんを、どうしようもなく苦笑いをするばかりです。

「あの晩、お前は家にいたのか」

平次は潮時を見てようやく問いを投込みました。

「それが不思議じゃございませんか、お嬢さんが行方不知になった晩も殺されて死骸になって帰った晩も、私は他所よそに泊つてこの家には居りませんでした。ええ本当ですとも、古金買いの金兵衛さんに留守を頼んで行つたんですから、間違ひはありません。嘘だと思ったら金兵衛さんに訊いて下さい」

「何処へ行つて泊つたんだ」

「あら、親分さん、御存じなかったんですか。まア、まア」

その大袈裟おおげさな表情に、好い加減胸を悪くして居ると、ガラッハは後ろからソツと囁いてくれました。

「お鶴はときどき家をあけて娘のところへ泊りに行きますよ。あんな若作りのくせに三十近い娘があるんです、その娘は池の端の出合茶屋で――」

「よしよし解つた。不思議にお前の留守を狙つて変なことが起つたというのだな」

「そうですよ親分さん」

「ところで、隣の金兵衛には女房があるのか」

「お神さんは五年前に亡くなったそうで、十三になる男の子と

たった二人暮しですよ」

「いつ見ても、恐ろしい洗濯物だが」

「近ごろは雨の降る日も洗濯物を取入れませんよ、ホ、ホ、ホ、あれが洗濯狂いと云うんでしょうね」

妙なところで笑うお鶴です、それが何よりも結構な媚^{こび}とでも思っているのでしょう。

「金兵衛は昔から古金買いをして居るのか」

「いえ、昔は結構な芸人だったそうで、本人もそれが何よりの自慢ですよ、尤も何んかのとき鼻唄位はやりますが、ちよいと錆^{さび}のある良い声で、——それに物真似^{ものまね}が上手ですよ、お隣の御浪人の真似や三河屋の若旦那の声色^{こわいろ}なんか、そっくりその儘で」

「フーム」

「あんな器用な人はありません、知恵も力も人並勝れていて、貧乏するのはよくよく運ですね、尤も近ごろは工面が良いようですよ」

お鶴の饒舌のなおつづきそうなのを背後に聴いて、平次は八五郎に眼配せすると、隣の空家の方へ行ってしまう。今日はよくよく中年女の饒舌^{じょうぜつ}に崇^{たた}られる日です。

「八、ここが臭いよ、開けて見な」

「へエー」

八五郎の金剛力を出すまでもなく、空屋の戸はわけもなく開いて、中からはカビ臭い空気——とは似もつかぬ、爽やかなものを感じさせる、明るさと華やかさが匂うのです。

「この家は何時ごろから空家になっているんだ」

「二三年空いているようですよ、隣が摘み綿の師匠じゃ、まとも

な人間は住み付きやしません」

「それにしちや変だね」

見渡したところ、一と通り掃除そうじも届き、火鉢にはごく最近炭火を起した形跡もあり、その辺の様子が何んとなく人間臭く整頓しているではありませんか。

「誰か住んでいましたね」

「そんなことだろうよ」

平次は外へ出ると、空家の前のあたり、鼻の先に立ち塞ふさがる塀越しに隣の浪宅——わけてもお茂世の部屋のあたりを見渡しておりました、ズカズカと塀側に寄ると、腹這いになるように、その辺の地面を嗅ぎ廻りました。

「八、——これを何んだと思う」

指したのは、一尺ほどの間隔かんかくをおいて、行儀よく並んだ長方形の深い穴が二つ。

「梯子はしごをおいた跡ですね」

「お前もそう思うか」

平次の注意は眼まぐるしく働きました。やがてお鶴の家の後ろから九ツ梯子を一つ見つけて来ると、いきなりそれを二つ並んだ穴の上へ——

「あつ、その梯子だ」

「シッ、声が高いぞ、八」

スルスルと梯子を登った平次は、いきなり忍び返しに手を掛けてゆすぶりましたが、これは恐ろしく時代が付いている癖くせに思いの外嚴重でビクともしません。

「忍び返しは抜けませんか」

と下からガラッ八、

「釘で打ち付けてあるよ、——新しい釘で、フム、五本かな、いや六本かも知れないぞ」

平次は梯子の上でしばらく唸^{うな}っていましたが、やがて下へ降りると、梯子を元へ返して、げんな顔をするお鶴と八五郎にはかまわず、古金屋の金兵衛の家の軒から三方に掛け渡した、太く逞^{たくま}しい物干竿^{ものほしざお}を外して、洗濯物を縁側へ投げ出したまま、ためつすかしつ釣竿屋^{つりざお}が釣竿を試すようなことをしておりました。

「八」

「へエ」

「お前、向うの家へ行って、妹さんの部屋に入って、しばらく様子を見てくれ」

「何を見るんです？」

「畳のめどでも勘定しているが宜い、俺が声をかけたら、縁側へ顔を出すんだ」

「へエー」

八五郎は何が何やら解らぬままに、飛んで行きました。空家の前から左へ少し行くと路地の行止りで、そこに隣の大滝清左衛門の浪宅の裏口——ちょうど妹娘のお勢の部屋から出る木戸があるのです。

九

八五郎は木戸を押し開けて入ると、ちょうど其処に居合せたお勢に声をかけて、裏口から四畳半に入れて貰いました。

「何にかお手伝をしましょうか」

「いや、畳のめどを算えて居りや宜^よんで、へ、へ、へ」

そう言つて小鼻をふくらませる八五郎の長い顔を、お勢はどんなに不気味なものにみたことでしょう。

しかし、本当に不気味なのは、これから起る不思議な事件でした。

「八、どうだ、畳のめどを勘定したか」

いきなり隣の部屋——曾^{かつ}て姉娘のお茂世が行方不明になった六畳の部屋から、親分の平次の籠ったような声がするではありませんか。

「親分、どこです？」

「俺は布団^{ふとん}を冠^{かぶ}つて寝ているんだよ、ちょいと来て見るが宜い」
「変な冗談ですね」

そんな事を言いながら立上った八五郎、何んの気もなく境の唐紙を開けて、隣の六畳を覗きました——

「おや？」

そこには親分の平次の影も形もなかったのです。

「驚いたか、八。そんなところにマゴマゴして居ると、下手人が逃げ出すよ、大急ぎで裏の空家へ引返してくれ」

親分の平次の声は、相変らず六畳の中で響きますが、その姿が部屋の中にも縁側にも絶対に見えないことを確かめると、さすがのガラッ八も無気味になったものか、

「どこです、親分。人を脅^{おど}かしちゃいけませんよ」

そんな事を言いながら、呆氣^{あっけ}に取られて見送るお勢には声もかけず、あたふたと裏口から飛出しました。

その時ちょうど空家の前には、思いも寄らぬ事件が展開していたのです。

「御用ッ」

叱咤^{しった}するのは、ツイ今しがた浪宅の六畳で声のした親分の平次です。

「何をッ」

恐ろしい勢いでその平次に突っかかって行くのは、中背の猛獣のような逞^{たく}ましい男。それが古金買いの金兵衛と判るまで、八五郎は一瞬躊躇^{ちゅうちよ}しました。

「神妙にしろ」

相手が近過ぎたのと、あまりに猛烈な襲撃を受けたので、得意の投げ銭を飛ばす隙もなかったものか、平次ほどの者も、脆^{もろ}くも突き飛ばされました。

「あッ」

という間に飛退った金兵衛、一気に逃げようとしたが、いけません。左の手首には早くも、平次の投げた捕縄がキリキリと巻き付いて居るではありませんか。

「野郎ッ」

ガラッ八の八五郎は猛然と飛付きました。そのうちに立ち直る平次、二人が力を協^{あわ}せさえすれば、金兵衛がどれほど獐^{どうもう}猛でも及ぶことではありません。

きりきりと縛り上げて見て平次は驚きました。これがあの愛嬌^{にゅうわ}のいい柔和^{にゅうわ}そのもののような、古金買いの金兵衛とは思えないほどの変りようです。顔は絶望と忿怒^{あいくま}に藍隈^はを刷いたよう、毒蛇のようにキラキラと光る眼、膏汗の浮いたこめかみには蚯^{みみず}蚓のような

な血管が腫^はれて、風のような呼吸、キリキリと噛む歯、この上もなく念入りに縛られながらも、ともすれば平次へ飛びかかろうとするのです。

十

殺されたお茂世^{もよ}の許婚で、西国のさる大名に仕えているという芝田^{かなめ}要は、その日の昼ごろ九州から入府、江戸屋敷の留守居に挨拶した上、その足ですぐ金助町の浪宅に大滝清左衛門を訪ねました。

許嫁のお茂世の死体は、この人の入府を待ってまだ入棺^{にゅうかん}もせずにいる有様、そこに通されて、一年振りの死顔に直面した芝田要の驚きは言うまでもありません。

「芝田氏、飛んだことに相成って何んとも申訳はない。が、これと申すも、娘の不所存^{ふしょぜん}から起ったこと、本来ならば父親の拙者^{せつしゃ}が坊主になっても詫をするところだが、今さらそれも詮ないことだ」
父親の大滝清左衛門は、膝に置いた手を畳に滑らせ、折入った様子でこの若い武家に詫るのでした。

「飛んでもない、父上、——それにしても、お茂世殿をこのような姿にした下手人は捨ておき難い、何人^{なにびと}の仕業でござる」

芝田要は意気込むのです、色の黒い、背の高い、左一眼の潰^みれた醜^{みにく}い武家で、お茂世に嫌われるのも無理のない姿ですが、その代り正直一途で、健康そうで、何んともなく頼母し気な青年武士です。

「そのお答えは私から申上げましょう」

平次は部屋の隅からにじり出しました。

「あれは？」

「町方の御用を承わる——平次、錢形の平次殿と言われる」

清左衛門はこの一介の町方御用聞に、並々ならぬ敬服の眼差を注ぎました。

「お嬢様をおびき出したのは裏に住む古金買の金兵衛と申すものでございますが、害めたのは、湯島切通しに屋敷を構える、三千五百石の大旗本、望月丹後と、その用人近藤幾馬と申すものでございます。お嬢様をおびき出して望月丹後の屋敷につれ込み、その最期まで見ていた金兵衛が、ことごとく白状した上、口書きまで取っておりますから間違いないと思います」

「何んと言われる」

芝田要の驚きは、やがて主人清左衛門の説明で、激しい忿怒に変って行きました。

「その望月丹後は、娘をどこやらで見掛けたそうで、強って傍近く召使いたいと人橋を架けて執拗こく申込んだ上、支度金と申し、大金まで持って来させたのじゃ。痩せても枯れても大滝清左衛門は武士の端くれ、娘を妾手掛にして、栄耀をしようとは夢にも思わぬ。一カ月ほど前に用人の近藤幾馬が来た時は、うんと恥かしめて追っ払ったが——」

清左衛門はそう言って声を吞むのです。頑固一徹なようでも、そのために美しく育った十九の娘を、非業に死なせた悔のようなものが、犇々と老いの胸をしめ付けるのです。

「その望月丹後は」

と芝田要。

「ぬくぬくとしております。相手が三千五百石取の旗本では、どんなに証拠が揃っても、町方御用聞風情の手が届きません」

平次も齒を食いしぼります。悪徳と偽善ぎぜんとを憎み抜く名御用聞の血は沸々としてたぎりますが、超こえることのできない階級制度は、十手も捕縄も何うすることもできなかつたのです。

「父上、——その始末をこの芝田要にお任せ下さらぬか」

「？」

「このまま泣寝入りしては、人間の道に反きます。金兵衛とやらの口書くちがきを持参して龍の口評定所へ駆け込み訴えをいたしましう」

芝田要は果してもえ立つような男だったのです。

「それはなるまい。相手は直参の人身、それを相手取っては藩公の御迷惑とも相成る」

「浪人をいたします」

芝田要の答えは至って簡単です。

「何？」

「百二十石の禄を捨てても、直参の非道を懲こらせば、惜おしむところは御座いません、——父上様も五年前、この芝田要が悪人共おとしに陥おとしられるのを救われて三百石の高禄を捨てて浪人なされました」

「だが、娘は、他の男に誘われて、うかうかと夜分外へ出るような不所存者であつた」

大滝清左衛門は、親としてこの上もなく恥入る様子でした。

芝田要はそんな事は耳にも入れず、その場から藩の江戸屋敷に戻り、永の御暇を願った上、銭形平次を伴ともなって、龍の口評定所へ真つすぐに駆け込んだのです。

それはむずかしい事件でした。が、芝田要の熱情と、その不屈の精神が若年寄を動かし、さらに望月丹後の不行跡の数々を、銭形平次が調べ上げて証拠を提供したので、幾月かの後龍の口の大評定となり、望月丹後は切腹を仰せ付けられた上、家禄を没収^{ぼつしゅう}。用人の近藤幾馬は、旧悪まで露見して縛り首になり、その年の秋にはことごとく一件落着しました。

「親分、芝田様と大滝様は一緒に帰参が叶った様ですよ」

フラリと訪ねて来たガラッ八が、珍らしく嬉しい便りを持って来たのは朗かな菊日和^{きくひより}の昼下がりでした。

「それはよかった、——俺のところへは、芝田様とあの妹娘のお勢さんと明後日の晩祝言するそうで、その御つかいが来ているよ、

——八五郎殿も御同道——という文面だ」

「へエ——、武家の祝言は少し肩が張るね」

「贅沢を言うな」

「ところで、前から聴きたいと思っていましたが、あの姉娘のお茂世さんが閉切った部屋から脱出^{ぬけだ}したり、死骸が出入口のない庭に投り出してあったのは、どういうわけなんでしょう」

八五郎がこの春の奇怪な事件を今さら想い出して訊くのです。
「何んでもないよ。あの晩、姉のお茂世さんは、妹のお勢さんが、父親の部屋で肩を揉んでいる間に、そっと妹の部屋から裏口へ忍び出たのさ。まだ宵のうちだから、あの四畳半の雨戸は開いていたんだ」

「すると、妹のお勢さんに一刻も後で——お寝み——と隣の部屋から声をかけたのは誰です」

「姉のお茂世さんさ」

「その時はもう帰っていたので？」

「いや、塀へいの外の空家の前にいたのさ、わからないのかな、梯子はしごの上から節々を抜いた竹竿で、自分の部屋の格子窓へ——お寝み——と声だけ送ったんだ。窓の障子に穴があいていたし、雨戸は閉めていなかった筈だ」

平次の説明は奇怪です。

「その竹竿は」

「金兵衛のところにあつた三本の物干竿が三本とも節が抜いてあつたよ」

「へエー」

「節を抜いた物干竿ものほしざおを誤魔化ごまかすためにあの騒ぎがあつた後は滅茶滅茶に洗濯物を掛けていたのさ——おれはそれを見ると何も彼も判つたよ。あの長いや短いのやいろいろの物干竿を使って、金兵衛の入知恵で若旦那の敬太郎はお茂世さんを出しては逢引して居たんだらう。金兵衛がうんと甘い汁を吸すつたことは言うまでもないよ」

「――」

ガラッハは事件の真相の怪奇かいきさに圧倒されて口もきけません。「あの晩は望月丹後に頼まれて、金兵衛が敬太郎の声色こわいろを遣つてお茂世さんをおびき出したのさ——金兵衛は芸人崩れで、声色こわいろがうまいと言つたのを知ってるだらう——、敬太郎に呼出されたつもりで、そつと家を脱出したお茂世さんが、敬太郎の姿が見えな

いので吃驚^{びっくり}したことだろうが、金兵衛はそれを撫^なめすかして切通しの望月丹後の屋敷につれ込み、妾奉公するように責めたことだろう。お茂世さんがどうしても言うことを聴かないので、ツイ責め殺してしまったのが本当の事だ」

「ひどい事をする二本差ですね。ところで、死骸が出入口のない庭にあったのは？」

「金兵衛の細工だよ。塀の外から梯子^{はしご}をかけて死骸を運び上げ、忍び返しを抜いてそこから庭へ投げ込んだのさ。古い忍び返しが五六本だけ、新しい釘で打ち付けてあるので気が付いたよ」

「なアーる、でも首尾^{しゅび}よく下手人が拳がって宜い塩梅^{あんばい}でしたね」

そう説明されると何んでもありません。ガラッ八はこの親分の明智のお蔭で明後日ありつける素晴らしい祝言の御馳走のことを考えておりました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「東北文庫」昭和二十一年一月号―二月号 新岩手社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部